

モハマッド・バクリ 公演とシンポジウム

四方田 犬彦

以下に記すのは、二〇〇六年十二月九日と十日にかけて、本研究所と文学部芸術学科が主宰し、国際交流基金の助成を受けて実現した、モハマッド・バクリの公演とシンポジウムについての記録である。ここに企画者であり、舞台の制作者であり、要するに雑役一般を引き受けた四方田犬彦が、その企画意図と事業結果について簡潔に記し、それをもって以下に続くシンポジウムの記録と演劇脚本の解説に代えておきたいと思う。

モハマッド・バクリは一九五三年にイスラエル北部のアル・ビナにパレスチナ人として生まれた。一九四八年にシオニストがイスラエル国家を成立させて、五年目のことである。彼はテルアヴィヴ大学映画演劇学科を最初のパレスチナ人として卒業し、それ以来、演劇、映画俳優として、またドキュメンタリー映画監督として活躍してきた。また彼はイスラエル映画のなかでパ

レスチナ人の役を演じる貴重な俳優であるばかりか、コスタ・ガブラス監督のフィルムをはじめ、フランス、イタリア映画に幅広く出演し、フェイ・ダナウェイの相手役を務めた。加えて、勃興しつつあるパレスチナ自治区での映画製作にも積極的に関わり、占領下にある民衆の姿を写すことで、イスラエルでもパレスチナ自治区でも、若者たちの間ではカリスマ的な支持を得てきた。またアラブ系のみならず、イスラエルのユダヤ系知識人も、彼のイスラエル映画への貢献には賞賛の声を惜しもうとしない。二〇〇四年にはパレスチナをめぐるドキュメンタリー映画『ジェニン、ジェニン』を監督し、この作品はイスラエル国内はもとより、国際的に上映されて、大きな影響を呼んだ。それは日本でも、ヴォランティア組織を通して、しばしば自主上映が行なわれている。

バクリはイスラエル演劇界においても重要な存在で、三十年にわたって舞台俳優としてのユニークな経歴をもっている。とりわけイスラエル国内に生きるパレスチナ人の社会的文化的状況をユーモラスに描いた、『エミール・ハビードの長編小説』『悲楽観屋サイードの奇妙な失踪』（二〇〇六年に作品社から山本薫訳にて刊行）を原作とした一人芝居によって、大きな評判を得た。バクリはこの作品をもつて世界中を公演し、それに伴ってシンポジウムがもたれるという形で演劇活動が長きにわたって続けられてきた。

この文の筆者である四方田は、二〇〇四年にテルアヴィヴ大学に客員教授として在籍中、「イスラエル映画におけるパレスチナ人の表象の変遷」という主題のもとに研究活動に従事してきた。その探求の途上でバクリの存在に着目し、六月にテルアヴィヴにおいて長時間にわたるインタヴューを行なうことができた。これについては、拙著『パレスチナ・ナウ』（作品社、二〇〇六）に収録されている「モハマッド・バクリの孤立」なる一文を参照していただきたい。今回の企画は、このバクリをイスラエルから招聘し、著名な一人芝居を披露していただくとともに、彼の監督したドキュメンタリー映画を上映、その後にはシンポジウムを開催するというものであった。

この企画の意図は、大きくいって三つに要約できる。
第一に、日本ではイスラエルもパレスチナももっぱら「民族

紛争」による犠牲者の数でしか新聞で報道されることがなく、事態があまりに錯綜しているため、なかなかその全体像を把握することが困難であると考えられている。今回の企ては演劇映画を通してイスラエル、パレスチナの言語と文化、社会状況に接するいい機会となるであろう。パレスチナ文化圏からの演劇の招聘は、二〇〇四年、〇五年のアル・カサバ劇場の招聘と公演によってようやく開始されたばかりであり、とりわけイスラエル国内のパレスチナ人のそれは、これまで日本では例を見ていない。これは実行するに充分の意義のあることである。

第二に、バクリが体現している、イスラエル国内に居住し、イスラエル国籍を所持しつつ、パレスチナ人であり続けるという特異な状況から生まれる言語芸術、映像芸術が、今日の世界中で生じているディアスポラ（離散）現象の文化的側面を理解するさいに、ひとつのモデルとして提示できるという問題がある。一つの社会に内在している文化的多元性を演劇を通して理解することは、日本社会における同様の文化的考察に大きな示唆を与えることであろう。

第三に、これまで日本文化と演劇を海外から眺め、理解しようとする試みは、ジャン・コクトーからロラン・バルトまで、もっぱら欧米人によってなされてきました。バクリが東京と京都に滞在し、アラブ文化研究家のみならず、日本の演劇人をはじめとする知識人、芸術家と交流したり、さらに日本文化の現在を観察したうえでその印象と考察を残すことになれば、アラ

ブ文化圏からの日本文化をめぐる貴重な評言として記憶されることになるだろう。

ここで、具体的にバクリとその助手のラミ・リヴネフの来日
の足取りについて、記しておきたい。

二〇〇六年十二月六日(水曜日)、彼らは成田に到着。四方
田による出迎え。明治学院大学ゲストハウスに案内。

十二月七日(木曜日)バクリ氏と日本側スタッフとの打ち合
わせ。大学施設であるアートホールに案内し、舞台制作のス
タッフと会合。月島から銀座へと観光をした後、映画監督であ
る足立正生、俳優の大久保鷹、映画制作者である小野沢稔彦ら
と会食ならびに意見交換。

十二月八日(金曜日) 終日、舞台準備。足立らの共同制作
である『略称・連続射殺魔』、足立の最新作『幽閉者』を観る。

十二月九日(土曜日) 七時よりアートホールにて、バクリ
公演『悲観楽観悲運のサイド』が行なわれる。招待客を含め
ると、二百六十人あまりの観客。その後、関係者を交え簡単な
レセプション。

十二月十日(日曜日)午後、バクリ監督作品『ジェニン、
ジェニン』、『あなたがいなくなって後』を上映の後、白杵陽
(中東史研究家、日本女子大教授)、田浪亜央江(イスラエル・
アラブ文化研究家)をまじえ共同討議。司会は四方田犬彦。シ
ンポジウム終了後にただちに新幹線で品川から京都へ直行。

十二月十三日(水曜日)京都市内元立誠小学校講堂にて、『悲
観楽観悲運のサイド』の、二度目の公演。

十二月十四日(水曜日)、ドバイ映画祭経由で帰国の旅に就く。

以下に掲載されるのは、十二月九日、十三日に上演された
『悲観楽観悲運のサイド』の脚本であり、田浪亜央江によっ
てアラビア語から翻訳された。二番目のものは、十二月十日に
開催されたシンポジウムの内容である。バクリの通訳を担当し
たのは、秋田大学助教授の三宅良美である。またバクリをめぐ
る関連記事としては、「ユリイカ」二〇〇七年二月号に四方田
犬彦『パレスチナ芸人、日本を行く』が、「世界」二〇〇七年三
月号にインタヴューが掲載されている。